

エロティックな「わたし」

吉田直希 Yoshida Naoki

エロティカ (erotica) の *O.E.D.* 初出は 1854 年である。だからといって、18 世紀にエロティカと呼べる作品がなかったわけでは決してない。啓蒙主義とは、無数の好色文学を生み出したまさに「理性(!?)」の時代の思想であった。エロティカ発信の地フランスでは、『哲学者テレーズ』に代表されるポルノグラフィの出版が激増したが、この手の本はカタログ上「哲学書」に分類されていた。これは書籍商の隠語であり、表の世界で流通させることのできない禁書あるいは取り扱い注意の書籍を指していた。もちろん、アブナイ哲学書に国境などない。当然のごとく英国にも次々と輸入され、スウィフト、フィールディング、スターンらも愛読(?)していたようである。では英国からの輸出はどうだったかという点、『ファニー・ヒル』はフランスでもベストセラーに名を連ねている。仏訳版『娼婦』(*Fille de joie*) は、検閲の目をごまかすために表紙は聖書、中身はファニー・ヒルという手の込んだ装丁で密かに取引されていたらしい。エロティカのおもしろさはこの種の偽装に隠されている。本論では、18 世紀エロティカの偽装を見事に暴く Robert Darnton の研究を出発点とし、ポルノグラフィ誕生の歴史的意義について考えてみたい。

ジャンルの多様性

さて、18 世紀の禁書取引の実態を詳細に調べ上げたダーントンであるが、彼がたどり着いた結論は少々つらいものだった。当時の読者がどのようにエロティカを読んだのか、それを知ることは不可能だというのだ。なぜなら、エロティカという枠組みがなかった時代に書かれた作品を、性的興奮という観点から論じ、読者の反応を推量したとしても、それは全くの時代錯誤となってしまうからである。そこで彼は方針を転換した。『娼婦』をはじめとする当時の「哲学書」がいかに多様なジャンルにまたがる言説であったかを明らかにしようとしたのだ。そうすれば、「純粋な」エロティシズムを追求しようとする悪しき本質主義も退けられる。たしかに、一読してわかるように『フ

ァニー・ヒル』では、性行為や性器の描写にあからさまな表現は使われていない。たとえば、娼婦ルイザと白痴少年ディックの刺激的なセックスシーンには、ラ・メトリの『人間機械論』を明らかに意識して書かれたと思われる *machine* という単語が何度も登場し、クライマックスでは彼も彼女も機械と化す。また、読者が目をシロクロさせるこの場面は、Negroes への言及からもわかるように、当時の人種問題をも示唆しているのだ。あるいは、*vagina* (もちろんこの語も作品中では一度も使われることはないのだが) を通して思索に耽る「哲学者」ファニーが、*natural philosophy* に没頭する場面にも出くわす。さらに、コール夫人の売春宿は *abbess* と呼ばれており、そこではキリスト教の儀式にのっとってバラエティ豊かなセックス・ドラマが上演されている。ようするに、Peter Wagner が *Eros Revived* で詳細に述べているように、18 世紀のエロティカは性を題材としながらも、性以外の何か *+a* をつねに呼び起こす仕掛けになっているのである。関連するジャンルの多様性、それが『ファニー・ヒル』を 18 世紀の隠れたベストセラーにした大きな要因と考えられるだろう。

エロティカと階級 / 小説の勃興

近代以前、エロティカの読者層は主に上流階級に限定されていた。ところが 18 世紀になるとこのジャンルは幅広い読者層を獲得する。特に顕著な変化は、中流階級が主たる購読者として登場したことだろう。さて Ian Watt によれば、小説の勃興と中流階級の台頭は歴史的に一致する。だが、彼の小説の定義に『ファニー・ヒル』は含まれない。中流階級は独自の道徳的価値観を表す「小説」というジャンルによってアイデンティティを確立したとする彼の考え方にしたがえば、ジャンルそのものが入り乱れたエロティカは当然対象外となるしかない。

では、それにもかかわらず、なぜこれほどまでに多くのエロティカが中流階級によって消費されてきたのだろうか？ 彼らが小説だけでなく上流

階級向けの「哲学」を積極的に吸収した理由を知るには、Michael McKeon の小説理論が有効だ。マッキオンはワットのように階級と小説をストレートに結びつけることはしない。彼はジャンルの混淆こそがこの時期の社会と文学の特徴であると考える。つまり固定化した中流階級といったものは存在せず、上流階級に反発しつつもどこか憧れの感情を抱く「揺れる」中流階級の姿が彼の研究からは浮かび上がってくる。

ならば、エロティカこそ中流階級に最もふさわしい文学と言えるはずなのだが、マッキオンもまたこれらを黙殺する。その最大の理由は、エロティカに内在する《脱-階級意識》にあるようだ。その階級横断性は、つきつめるとメタレベルから「階級」それ自体に対して異議申し立てを行うことになりかねない。当然そうなると、小説や中流階級といったジャンルの諸起源を探る文学研究は自らの存在意義を失うことになるだろう。

では、今日の文学研究において、エロティカの脱-階級的視点を生かす有効な議論は何か。それはおそらく Jürgen Habermas による公共性の概念だろう。彼の議論はひとことで言えば、現実社会とは異なる次元の公共圏という領域を設定し、そこに脱-階級的な近代主体の姿を描き出そうとするものである。公共圏 (Republic of Letters) では、個々の成員の立場は平等であり、内部に特権的な階級は認められない。とはいえ、メンバー全員が一樣に共同体的精神を発揮したわけではない。文芸共和国での議論というものは、活字となって広く読まれる。だが、全員が同じ思想を共有することなど当然ありえない。いかなる啓蒙的精神もつねに娯楽的パロディによって「自由に」書き換えられる可能性がある。そんな自由な公共圏であるからこそ、規制の対象でもあるエロティカがベストセラーになったのだ。

エロティックな「わたし」

この文芸共和国で誰もが関心をもち、最も熱く議論された話題が、公共圏を規定する「わたし」という基本概念であった。この「わたし」は手紙という媒体によって公共圏内で広く流通していったが、手紙は単なるコミュニケーションの手段ではなかった。手紙とは送り手である「わたし」の内面でもあり同時に身体でもあったのだ。だからこそ手紙の公開はエロティックなのだ。それは読む者にさまざまな反応を引き起こし、さらにその

反応が別な関心をひきつける。こうしてつねに作り変えられる「わたし」は制御不能なもう一つの自分と考えられたとしても不思議はないだろう。外の見物人から見られ構築される自分、しかもその外部の匿名性がまた刺激的であった。こうして出来上がった公共の「わたし」が実際、何を語っていたのか。『ファニー・ヒル』の冒頭の一節によって確認しておこう。

Truth! stark naked truth, is the word, and I will not so much as take the pains to bestow the strip of a gauze-wrapper on it, but paint situations such as they actually rose to me in nature, careless of violating those laws of decency, that were never made for such unreserved intimacies as ours; and you have too much sense, too much knowledge of the *originals* themselves, to snuff prudishly, and out of character, at the *pictures* of them. (1)

ファニーは架空の受取人に向かって「素っ裸の真実」(stark naked truth) を書き記すと宣言している。もちろんこうした前口上は書簡体(告白)小説の常套句であり、主人公である「わたし」が決してありのままには姿を見せることはない。語り手である「わたし」は最初から「信頼できない作者」として登場する。引用の後半において、この語り手はコピー (*pictures*) に対するオリジナル (*originals*) の優位を主張する。だが、このあてにならない語りは、オリジナルの絶対性にたいして重大な疑問を投げかけていないだろうか。従来のオリジナル信仰を崩す、作品の新たなオリジナリティを「偽装された真実」の裏に読み込むこと、それが私たち読者に要求されているかのようである。

さて、作品のレベルで『ファニー・ヒル』が参照するオリジナルは『パミラ』である。ファニーはリヴァプール近郊の村からロンドンに向かう馬車の中で、友人から《美德》(virtue) を守り通したおかげで玉の輿にのった田舎娘の話を聞かされている。ファニーもまた、チャールズに対する内なる《美德》(virtue) を保ちつづけ、結婚で大団円をむかえる。つまり『ファニー・ヒル』は一連のパミラ論争を形成する作品であり、ファニーにパミラを重ね合わせる(あるいは逆にパミラにファニーを見出そうとする)読者は多数いたであろうことは想像に難くない。

『パミラ』からの次の引用は、ナイトキャップを被って暗がりに潜む B 氏の正体に気づかずに

パミラが床につく有名な場面であるが、彼女の美德はここで最大の危機をむかえる。

But, I tremble to relate it, the pretended She came into Bed; but quiver'd like an Aspin-leaf; and I, poor Fool that I was! pitied her much. —But well might the barbarous Deceiver tremble at his vile Dissimulation, and base Designs. . . . and my Confusion, when the guilty Wretch took my Left-arm, and laid it under his Neck, as the vile Procuress held my Right; and then he clasp'd me round my Waist! (203)

ここに登場するにせの女中はジュークスの手引きで寝室に忍び込み、パミラをレイプしようとする。しかし、ついさっきまで聞こえていた女中にはげしい息遣い (breathe all quick and short) がベッドの中では一転して怯えているような震え (quiver'd like an Aspin-leaf) となってしまう。B氏はここでジュークス (Procuress) の介添えを得て、パミラを力づくでものにしようとするのだが . . .

He was as rude as possible to me; but I remembered, Mamma, the instructions you gave me to avoid being ravished, and followed them, which soon brought him to terms, and he promised me, on quitting my hold, that he would leave the bed.

O Parson Williams, how little are all the men in the world compared to thee!

My master was as good as his word. (324)

というように、レイプは未遂に終わる。ただしこちらの引用はフィールディング作『シャミラ』からのものである。先ほどの場面で、ほどなくパミラは失神 (dying) してしまい、彼女は自分が無事かどうかもわかっていない。だから、ここに示した二作品の切り貼りは、わたしの妄想として片付けてしまいかまわない。だが、この場面で牧師ウィリアムズに対する性的な告白 (パロディ) をもってくることによって、オリジナルのパミラが偽装された存在 (the pretended She) として、そしてエロティックな存在として見えてこないだろうか。ウィリアムズに比してなんて世の男ども (の××) が little (!) であるかという彼女の不満はオリジナルのパミラが B 氏に抱く不安にも通じるものがあるようだ。こうしてにせのパミラ (Sham + Pamela) はオリジナルを「自由な」解釈に開かれたエロティックな対象に変えてしまうの

だ。ちなみにファニーの場合、レイプは相手のパワー不足によって失敗している。B氏は一体どうしてあそこで中断してしまったのか? エロティックな解釈は止まらない。

その後、二人のパミラ、ファニーは、結婚というカーニバルによって一時的に階級というジャンルの壁を超えることに成功する。ただし、結婚によって「わたし」が安定した主体性を獲得するわけではなく、議論の中心は階級からジェンダーへ、ジェンダーによる新たな差異化へと移動する。18世紀とりわけその後半において「女性読者」の反応は文芸共和国で活発に議論されていたトピックの一つであった。

エロティカとフェミニズム

Approaches to Teaching World Literature のシリーズの中で Felicity A. Nussbaum は現代のロマンス (Harlequin や *Pretty Woman*, *Sex and the City* 等) を女性のポルノグラフィとみなす議論に強い関心を示している。現代大衆文化論と『パミラ』を大学教育の場で結びつける彼女の試みは、18世紀のエロティカを検討する際にも重要な視点を提示している。今日においてもなお、なぜこんなにも多くの「女性」が男女の不平等を積極的に認め、中流階級の家庭生活を理想とするこれら大衆ロマンスを受容しつづけているのか? このような問題意識から18世紀のエロティカを再検討してみると、現代版ロマンス・ポルノグラフィの原型は実はアンチ・ロマンスを謳う『パミラ』に求められることになりそうだ。

『パミラ』は、《愛のあるセックスと結婚》を女性の理想的《美德》として提示し、それ以外のくずれた美德 (vartue) と差別化をはかっている。もちろんこのオリジナルな《美德》は『パミラ』がエロティカから完全に切り離されることを意味するものではない。なぜならジェンダーという枠組みの中に収まっているかぎり virtue とにせの vartue はつねにエロティックな関係にあるからだ。

すでに見たように、パミラの隠れた欲望を明らかにする解釈は、フィールディングにしるクレランドにしる、「男性」読者によるものがほとんどである。それは、女性の美德を身体レベルの純潔に還元し、美德が実は性的な欲望を隠す手段にすぎないのだと暴露する、まさにそのような探りに悦びを見出すものである。こうした読みは「見る

男性 vs 見られる女性」という図式をもとに、エロティックなパミラのコピーを作り出す。では、男性による女性の客体化に対して「女性」読者はどのような反応を示すだろうか？

実はリチャードソンは予め、こうした視線の非対称性を崩す仕掛けを用意していた。それは「女性」読者のためだったのか？ 女性の(男性の視線に取り込まれない)自由な主体性を探るフェミニズム批評はこの点を見逃さないだろう。パミラの身体とは手紙に記される仮想の身体であり、彼女は手紙を書き続けることで、この身体を盗み見る男性の性的欲望をつねに意識的に生産しているのではないか。この場合、手紙の内容が真実をそのまま伝えているかどうかは問題にはならない。うそだとわかっていても「男性」は信じてしまうことをパミラは見抜いている。パミラによる男性読者のコントロールこそがまさに重要なのだ。このように解釈すると、パミラは単に見られる存在とは言えなくなる。むしろ、仮想身体を主体的にコントロールし、女性の《美德》を《Love=Sex→Marriage》という中流階級のイデオロギーに結びつけることに積極的に貢献していると考えられるだろう。となれば、パミラが女性の主体化を見事に体現していることはまず間違いない。だが、このように〈見る主体〉としてパミラを再評価したまさにその瞬間に、パミラは virtuous な存在ではなく、エロティックな存在へと変化することになる。このとき、パミラはもはや従来の virtue を求められる「女性」という枠組みには収まらない、男性の欲望を喚起するエロティックな存在となるわけだ。

だが、このような「女性」独自の読みを追求することは本当に有効なのだろうか。ここには再び男性セクシュアリティに回収される危険性がつねに存在する。むしろ大事なのはジェンダーの枠組みの中で脱-主体化を目指すエロティックな読みの可能性を探ることではないだろうか。ハーバースのいう「私的な公共圏」というのはまさにそのような読みを可能とする開かれた空間なのである。

見ること / 読むこと

今回は小説を中心に18世紀エロティカについて考えてみたが、もちろん演劇、詩、絵画、あるいは音楽についても同様の議論が可能であろう。たとえばホガースの絵画は「エロティック」であ

る。世紀後半のローランドソンのそれと比較すると、そのジャンルの無節操は秀逸だ。ホガースの場合、性描写はかなり抑制のきいたものとなっているが、その理由は彼の作品の購買層が、ピューリタンの中産階級であったからだと言われている。たしかにホガースは、露骨に性的なイメージを使う場合、鑑賞者がそこから道徳的メッセージを読み取れるように工夫を施している。したがって見ようによってはどれも道徳モノと見えなくてもいいわけだ。だが、ここで《エロティックな「わたし」》がホガースの「道徳的な作品」を手にとると、その「わたし」は表面的な性的イメージに留まらず、作者自身さえ意図しない箇所にも性的イメージを読み取ってしまうかもしれない。「わたし」は絵画のいたるところに隠されているさまざまなアイテムを丁寧に(しかも無節操に)集めつつ、それらを相互に関連づけて一連の物語を作り上げる。それは、もともとホガースに求められていたことなのかもしれないし、あるいは、求められる以上に、鑑賞者が精力的な読解に誘われた結果なのかもしれない。そういえば、ホガースの傑作『前と後』で女主人公は前戯として、聖なる書の傍らでロチェスターの詩を密かに読んでいた...

引用文献

- John Cleland, *Memoirs of a Woman of Pleasure*, ed. Peter Savor. Oxford UP, 1985.
- Robert Darnton, *The Forbidden Best-Sellers of Pre-Revolutionary France*. Norton, 1996.
- Henry Fielding, *Joseph Andrews and Shamela*, ed. Martin C. Battestin. Houghton Mifflin, 1961.
- Jürgen Habermas, *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*, trans. Thomas Burger with the assistance of Frederick Lawrence. MIT P, 1996.
- Michael McKeon, *The Origins of the English Novel, 1600-1700*. Johns Hopkins UP, 1987.
- Felicity A. Nussbaum, "Naughty Pamela's 'Sweet Confusion,'" in *Approaches to Teaching the Novels of Samuel Richardson*, eds. Lisa Zunshine and Jocelyn Harris. MLA, 2006.
- Samuel Richardson, *Pamela; or, Virtue Rewarded*, eds. Thomas Keymer & Alice Wakely. Oxford UP, 2001.
- Peter Wagner, *Eros Revived: Erotica of the Enlightenment in England and America*. Paladin Grafton, 1990.
- Ian Watt, *The Rise of the Novel: Studies in Defoe, Richardson and Fielding*. The Hogarth P, 1987.

(小樽商科大学准教授)